

Newsletter

4

December 1, 2008

北海道大学大学院文学研究科・教育学研究院・経済学研究科
カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センター

CONTENTS

- 2 日本心理学会
2008年度大会
シンポジウム
"Reciprocity, cooperation,
and fairness: What is
unique to human and why"

- 3 日本心理学会
2008年度大会
一般公開招待講演
"The ten dragons that
threaten pro-environmental
behavior (And how psy-
chologists can help to slay
them)"
その他の活動報告

- 4 その他の活動報告

日本心理学会2008年度大会、 シンポジウムと招待講演の開催

2008年9月19日から21日にわたり、日本心理学会2008年度大会が北海道大学で開催されました。大会では、本拠点から多くの院生・教員が研究報告を行い、さらに本拠点によるシンポジウムと一般公開招待講演が企画・開催されました。本号では、大会1日目に開催されたシンポジウム "Reciprocity, cooperation, and fairness: What is unique to human and why (互惠性、協力、公正: ヒトの特異性とその理由)"、および、大会3日目に開催された一般公開招待講演 "The ten dragons that threaten pro-environmental behavior (And how psychologists can help to slay them)、環境配慮行動をおびやかす10匹の怪物(そして心理学者はいかに怪物を退治できるか?)"の内容を中心に紹介いたします。



日本心理学会2008年度大会シンポジウム

本シンポジウムは、当グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」、特定領域研究「実験社会科学—実験が切り開く21世紀の社会科学」との共催で行われました。

Reciprocity, cooperation, and fairness: What is unique to human and why

互恵性、協力、公正：ヒトの特異性とその理由

スピーカー Kavın McCabe (George Mason University)、田中正之 (京都大学)、山岸俊男 (北海道大学)



Kavın McCabe

社会科学は現在、大きな曲がり角にさしかかっている。20世紀の社会科学は、経済学に代表されるように数理モデル化が進行する一方、文化人類学や社会学の

一部に代表される理解と解釈の学への傾斜を強めていた。そしてそのいずれにも欠けていたのが、人間性についての科学的理解であった。そして、「経済人」や「政治人」といった神話を現実に戻す役割を果たすべき心理学は、この社会科学からの要請に十分に答えることができなかった。その結果、実験経済学に代表される社会科学の新しい潮流は、心理学を素通りして、「神経経済学」への流れ込みつつある。

本シンポジウムでは、実験経済学の創始者として2002年にノーベル経済学賞を受賞したバーノン・スミス教授と長年にわたり共同研究を続け、神経経済学



田中正之

への動きを先導したケビン・マケープ教授(写真①)に、なぜ経済学は神経経済学を志向するのか、経済学者は神経経済学に何を求めているのかといったことを中心にお話しをしていただいた。マケープ教授の研究テーマは、「善意会計」という言葉に代表される利他性や互恵性といったヒトの性質を、経済学のモデルにどのように組み込むかという問題であり、進化の産物であるヒトが如何にして高度な協力行動と複雑な社会を形成してきたのかという問題である。



山岸俊男

この問いに対する答えを求めた社会学者の多くは、神経科学との連携を志向する一方、同時に、進化心理学および霊長類学との対話を進めている。本シンポジウム

では、ヒトの理解に欠かすことのできない、チンパンジーに代表される類人猿における協力行動、互恵行動、利他行動などを進めている田中正之教授(写真②)に、類人猿の協力行動についての最新の研究の紹介をお願いした。

また、シンポジウムの提案者である山岸俊男教授(写真③)は、実験経済学者が行っている実験ゲーム研究と、社会心理学者が行っている実験ゲーム研究の相違点を中心に、心理学は社会科学との対話から何を学ぶことができるか、また、心理学が社会科学に何を提供できるか、そしてそのためには心理学が何をしなくてはならないかなどについての議論の材料を提供した。



- 企画：山岸俊男(北海道大学)
- 司会：長谷川寿一(東京大学)
- 日時：2008年9月19日(金) 13:00~15:00
- 場所：北海道大学 北海道大学高等教育機能開発総合センター N302

日本心理学会2008年度大会一般公開招待講演

本講演は、当グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」との共催で行われました。

The ten dragons that threaten pro-environmental behavior (And how psychologists can help to slay them)

環境配慮行動をおびやかす10匹の怪物（そして心理学者はいかに怪物を退治できるか？）

スピーカー Robert Gifford (University of Victoria)

持続可能性と気候変動は、今日世界が直面している最も重要な問題のひとつである。多くの場合人々は、自然科学者、技術者、政治家がこうした問題を解決するに違いないと考えている。そうした専門家の役割は重要であるが、心理学者やその他の社会科学者の協力なしでは、環境問題を解決することはできない。本講演では、環境問題の「全体像」を示し、市民の持続可能性をもたらす行動・環境配慮行動を妨げる10の主要な障害について紹介した。そして、心理学者が他領域の専門家と協力して、そ

うした障害を克服するために不可欠な役割を果たす筋道を提唱した。



Robert Gifford

- 司会：大沼進（北海道大学） ●抄訳：畑倫子（日本大学）
- 日時：2008年9月21日（日） 10:00～12:00
- 場所：北海道大学 北海道大学高等教育機能開発総合センター 大講堂

その他の活動報告

第4回 一般公開ワークショップ

本ワークショップは、北海道大学社会科学実験研究センターとの共催で行われました。

スピーカー
依田 高典
京都大学大学院経済学研究科

『経済心理学から見た禁煙成功要因』

禁煙を開始した608名を対象に5ヶ月間の追跡調査を行い、合わせてコンジョイント分析を用いて時間選好率や危険回避度のような経済心理学パラメータを測定した。本論文の主要な結論は2つある。第一に、調査開始時点でも、調査終了時点でも、喫煙成功者の方が禁煙失敗者よりも危険回避的である。また、両時点間で、禁煙開始者の時間選好率は低下する一方で、禁煙失敗者の時間選好率は増加した。第二に、社会人口変数、個人属性と並んで、時間選好率、危険回避度は禁煙成功を説明する重要な変数である。インパクトの大きさは時間選好率の方が危険回避度よりも大きかった。

日時
2008年8月20日（水）
18:00～
場所
北海道大学大学院文学研究科 E204
参加者
山岸俊男、松島俊也、大沼進、高橋泰城、他6名（計11名）

第5回 一般公開ワークショップ

本ワークショップは、北海道大学社会科学実験研究センターとの共催で行われました。



スピーカー
佐竹 暁子
北海道大学創成科学共同研究機構・
大学院地球環境科学研究科

『生態系と人間社会系のカップリング』

ほとんどの生態系は人間活動の強い影響を受けて成り立っているため、その挙動の理解には、人による経済的・社会的意決定を無視することができない。他方で人間活動は、生態系の状態に影響を受けて動的に変化する。現在、こうした生態系と人間社会間のフィードバックの重要性が指摘され、地球温暖化や生物多様性の喪失といった環境問題を理解するために、人々の意思決定の動態と森林や湖沼などの生態系とのダイナミクスを結びつけたシステムの研究が盛んに進められるようになってきた。本発表では、森林生態系を対象にして、土地所有者の意思決定と森林動態をカップルした土地利用モデルを紹介し、特に、社会学習とゲーム理論に焦点をあてた。

日時
2008年9月30日（火）
14:30～16:30
場所
北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309
参加者
大沼進、高橋伸幸、肥前洋一、他12名（計16名）

第7回 国際ワークショップ

本ワークショップは、北海道大学社会科学実験研究センターとの共催で行われました。



スピーカー
Yaniv Hanoch
University of Plymouth

Choosing the right drug plan: Older adults, choice size, and numeracy

アメリカのメディケアシステムにはさまざまな保険オプションが存在する。しかし、これらの保険制度は複雑なものであり、消費者に困難な意思決定を強いるものである。本発表では、人々がどのように複数の保険オプションの中から自身が選好する選択を行うかを検証した実験の結果を報告した。実験の結果、年齢が上がるほど保険オプションに対する理解度が下がるにもかかわらず自身の選択に自信があると答えることが明らかになった。これらの結果から、発表者はメディケアシステムの制度設計を見直す必要があると指摘した。

日時

2008年8月7日（木曜日）

10:30～15:30

場所

北海道大学人文・社会科学

総合教育研究棟 W309

参加者

山岸俊男、亀田達也、
結城雅樹、大沼進、他16名
(計20名)



スピーカー
Michaela Gummerum
University of Plymouth

The development of prosocial behaviour in children and adolescents

本発表では、子供における向社会的行動の発達について一連の研究を報告した。実験では子供が向社会的行動を行うかどうかを集団討議によって決定するという課題を行ったところ、発達の初期段階では自己利益追求型の選択肢が選択されやすいが、発達の段階ごとに合議によって選択されやすい選択肢が変わることが明らかになった。これらの実験結果から向社会的行動は、発達のそれぞれの段階において社会化の影響を受けていることが示唆された。

第8回 国際ワークショップ

本ワークショップは、北海道大学経済学研究科近代経済学研究会、北海道大学社会科学実験研究センターとの共催で行われました。



スピーカー
Nathan Berg
University of Texas-Dallas

Normative economics without consistency axioms?: Three empirical examples using food prices, lab experiments with time tradeoffs, and non-Bayesian cancer-risk beliefs among economists

これまでの経済学は合理性を意思決定を前提にしてきた。しかし、近年の実験経済学や心理学の知見によれば、人々の意思決定は合理性から乖離していることが明らかになっている。本発表では、癌に対するリスク認知、食料品の購買行動、時間選好およびリスク選好の実験および調査の結果を報告した。一連の研究の結果、社会的に成功していると認識されている人々の意思決定は、そのほかの人々に比べて著しく合理的解から乖離していることが明らかになった。これらの研究結果から、経済学的意思決定の枠組みを新たなものに修正すべきであることが示唆された。

日時

2008年8月7日（木曜日）

16:00～18:00

場所

北海道大学 人文・社会科学総

合教育研究棟 W309

参加者

山岸俊男、亀田達也、大沼進、
肥前洋一、他16名
(計20名)

グローバルCOE

心の社会性に関する教育研究拠点

The Center for the Sociality of Mind

GLOBAL COE
CSM

〒060-0810

札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学大学院文学研究科行動システム科学講座

TEL 011-706-3057

E-mail gcoe-csm@lynx.let.hokudai.ac.jp

Homepage <http://lynx.let.hokudai.ac.jp/CSM/>